日本におけるカフェ・バーの店舗デザインの変遷

−専門誌掲載作品の分析から−

望月一輝（指導教員 八尾廣）

1. はじめに

1. 1. 研究の背景と目的

日本の店舗デザインは、戦後の人々の生活様式の劇的な変化や建築物などの近代化を背景に、多様なスタイルや流行を生み出してきた。そして、80 年代後期からのバブル経済の訪れとその崩壊を機に、さらに大きな変化が生じたように思われる。

中でも、カフェやバーといった年齢や性別に縛られない多様な人間が利用する業種の店舗では独特の変化が見受けられ、本研究では、店舗デザインの代表的な雑誌『商店建築』の掲載作品を通して、日本のカフェ・バーのデザインの変遷を把握することを目的とする。

1. 2. 研究方法

株式会社商店建築社から発行されている専門誌『商店建築』に掲載されているカフェ、バー作品を対象とし、1975 年から 40 年間分の作品の基礎データを表にまとめる。次に、資料を基に各作品の空間の性質を表現している言葉を抽出し、KJ 法[注1)]に基づき年代ごとの比較分析を行う。

2. 内部仕上材の変遷

基礎データを基に、床、壁、天井の内部仕上材を【石質系】【繊維系】【木質系】【窯業系】【合成樹脂系】【金属系】【PB+AEP】といった分類ごとに、作品に用いられた件数を集計し、各年代の割合[注2)]を表した。

2. 1. 床面の仕上材の変遷

床仕上においては、【繊維系】素材は、2000 年代以降は使用されなくなり、【木質系】素材が 90 年代に使用率が急増し、その後定着している。【窯業系】は、80 年代以降極端に減少し、近年再び増加傾向にある。【石質系】素材は、90 年代以降に使用率が減少していることが読み取れた。また近年では、コンクリートやモルタル地にクリアウレタン等の仕上げをする店舗が非常に多くなっている傾向にあった。(図 1)

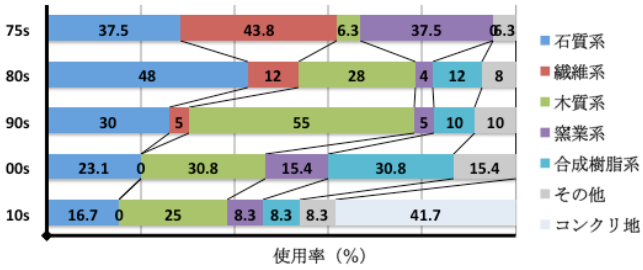

図 1 床材素材別使用件数の通時的変動

2. 2. 壁面の仕上材の変遷

壁仕上においては、【石質系】が 90 年代以降減少し、【木質系】が増加傾向にあることがわかった。【窯業系】も 70 年代に多く使用された後減少し、近年再び増加傾向にある。【合成樹脂系】は 80〜90 年代には殆ど用いられていないが、2000 年代より一定の割合で用いられるようになる。【金属系】は 80 年代に最も用いられているのが注目される（図 2）。

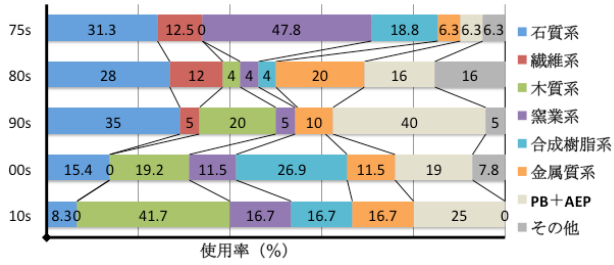

図 2 壁材素材別使用件数の通時的変動

2. 3. 天井の仕上材の変遷

天井仕上においては、70 年代には使用されていなかった【PB+AEP】の使用率が 80 年代以降極端に増加し、過半を占めることがわかる。【PB+AEP】以外は 90 年代以降使用件数が減少し、近年は素材のバリエーションが減少している傾向が見受けられる。（図 3）

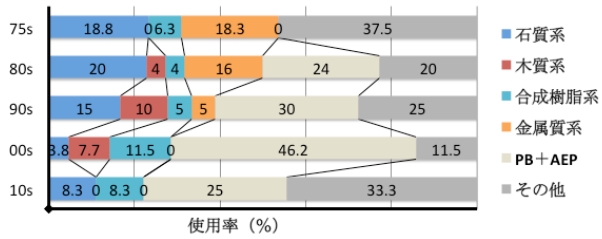

図 3 天井素材別使用件数の通時的変動

3. 店舗デザインの内包する空間的性質

KJ 法により分類した空間の性質について分析した結果、心理的作用を人間にもたらす性質である《心理作用性質》、空間の表現形式や形態を表す《空間形態性質》、店舗の雰囲気を完成させるため、空間に付加させる性質のまとまり《付加性質》の、大きく３つの集合体に分類することができた。

3. 2. 《心理作用性質》の構成

《心理作用性質》は,[明快][穏和][昂揚][閉覆]の、４つの性質群に分けられる。

[明快]は〈開放〉〈軽量〉〈画一的〉〈純性〉の４つの性質から構成されており、[穏和]は〈親和性〉〈上級〉の２つで構成される。[昂揚]は、〈愉快性〉〈攻撃性〉〈迫真〉の３つで構成され、[閉覆]は〈陰気〉〈安静〉〈制圧性〉の３つ性質から構成される。

3. 3. 《空間形態性質》の構成

《空間形態性質》は、《心理作用性質》を表現するために施される空間デザインの基礎となる性質である。素材感が生み出す空間のイメージを表す性質群の〈素材形態〉、空間構成や配色の形式や形態を表す性質が属す〈表現形態〉、形状や配色の状態を表すまとまり〈整合性〉の、３つの性質が抽出できた。

4.結

1975 年から 1980 年にかけては、〈画一性〉や〈軽量〉、〈愉快性〉、〈制圧性〉や〈安静〉といった性質を強く表現する傾向にあった。この時代は、様々な表現が混在している不安定な環境であったため、「無造作」や「不調和」といった、デザインの完成度の未熟さを表した性質も見受けられた。

90 年代初頭にかけ、バブル経済による好景気の影響か、【石質系】や【金属質系】の素材が積極的に使用され、［高揚］や［閉覆］の性質表現が多く、視覚情報が強いデザインとなっていることがうかがえた。

その後バブル経済が崩壊した 1990 年代からは【木質系】の使用が急激に増加し、【木質系】が生み出す「カジュアル」や「ナチュラル」といった性質により、［穏和］や［閉覆］の〈安静〉といった、親和性の高い表現をする傾向が見受けられた。

そして現在にかけて、90 年代の素材的・性質的傾向を維持し、［明快］の〈開放〉や〈安静〉の表現追求を行い、さらに最近では、「開放感」の強化や「ラスティック」といった性質を加えることで、利用者の快適性を重視した傾向が読み取ることができた。

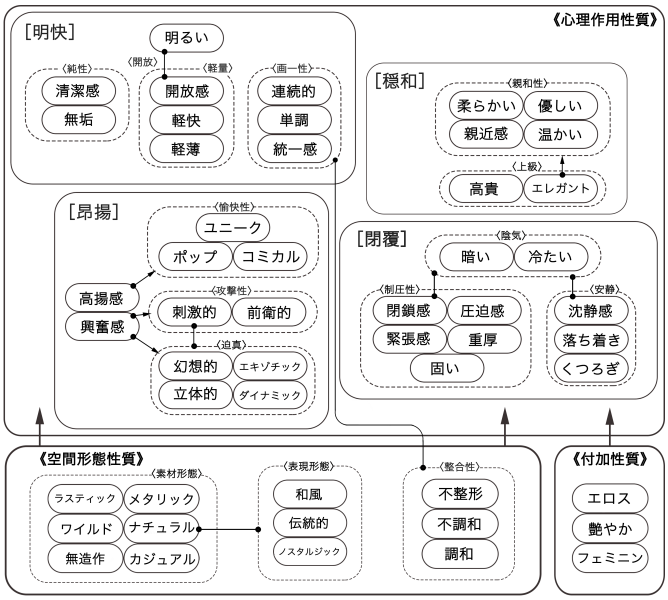

図４ 空間の内包性質

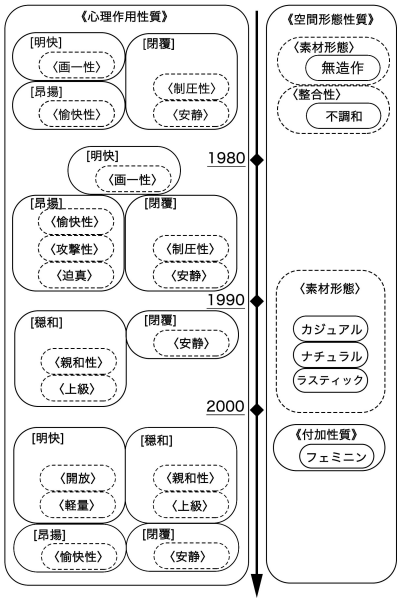

図５ 性質群の通時的変動

注1)　KJ 法とは、文化人類学者の川喜田二郎により考案された、情報整理や発想の手法である。

注2)　一店舗で別種仕上材が重複している場合、総計が必ずしも 100%にはならない場合がある。